

福祉専門職の倫理観構築のための一考察 －人間疎外による倫理観への影響－

Considerations for the Establishment of Ethics for Welfare Professionals: The Effect of Alienation on Ethics

(2018年3月31日受理)

中 野 ひとみ

Hitomi Nakano

Key words : 福祉専門職, 倫理観, 人間疎外, 教育, 環境

要 旨

人間は成長発達の過程で数多くの社会的経験を積み、自分自身の価値を形成していく。人に対する思いやりや善悪の判断などの倫理観や道徳的思考も同様にして培われていく。しかし、自分にとって理不尽な状況下に置かれた場合、人はそれまでに培われてきた確固たる揺ぎ無い思考でも、時として心が揺らぎ自分自身の倫理観や価値が歪むこともある。近年多発する社会的問題にも、少なからず人倫的要素が大きく影響しているとされる。こうした倫理観の歪みの背景には、現代社会の複雑化と人間疎外も関与していると考えられる。他者を顧みない社会的逸脱行動行為が問題視されるなかで、他ならぬ対人援助の専門職を養成する教育現場において、倫理的観点は対象者を支援するうえで、最も重要な視点である。福祉専門職を養成する教育カリキュラムのなかでは、対人援助職として倫理綱領を中心とした講義の展開は必須とされ、複雑に絡み合ういくつもの科目の中で統合的に教授している。

制度や職種の煩雑化など、福祉施設の課題は山積し、そこに従事する福祉専門職の倫理観は、他者を支援するうえで大きな要素であるといえる。近年、マスメディアなどでクローズアップされる福祉現場での職員による社会的逸脱行為などの問題は、ますます複雑化を呈し福祉専門職の倫理観とは何かを問うことが多くなっている。人間疎外が進むことでの価値の変容と福祉専門職の倫理観への影響について考察する。

I. は じ め に

1. 研究の視点

近年の目を見張る科学技術の進歩は、人間の社会生活に多くの利便性をもたらしている。一方で、耳を疑うような社会的問題も多発し、閉塞的な世の中に危機感を抱くことも確かである。社会が発展してきた輝かしい功績の背景には、人間の利己主義が少なからず働き発展してきたことも事実である。こうした現状は、形を変容させながら現代社会でも様々な問題へと発展している。コミュニケーションの多様化や人間関係の希薄化によって起こる、他者を顧みない行動行為が問題視され、現代社会

で起こる数多くの社会的問題には、人倫の喪失が少なからず関与していると言ってよい。価値の多様性が叫ばれ、個別性や自由な発想は今後ますます加速していくことで、さらに複雑化を呈することが予想される。こうした自由な発想は時として、価値の摩擦や争いにも発展することも危惧される。利己主義的な考え方が当たり前となり、人が人間らしさを見失い人間疎外が進むことは、社会の発展のなかで不安材料でもあり、人倫的研究や道徳教育の見直しもその現れであるといえる。生活の豊かさとは裏腹に、機械的、利己的な社会が人間の倫理観を歪ませることに少なからず無関係であるとは言い難い。

倫理観や価値の形成には、人間の成長過程で多くの経

験を積み培っていくものである。人との調和や関係性は、人間形成を行ううえで最も重要な部分であり自己成長に繋がる部分ともいえる。しかし、近年この人間関係の綻れによる社会問題が多発していることも事実である。複雑化を呈する社会において、人との関係が時として人の倫理観を歪ませる要因ともなり、それが大きな社会的問題に発展することがある。倫理や道徳は、社会生活のなかで最も重要とされる部分ではあるが非常にわかりにくく、脆弱で曖昧な側面をもっており表現しづらく見えにくい。言うならば、人間が重要と捉える価値の多様性がそれぞれ違うからこそ、心的部分は余計に複雑で表現しづらい側面を持っている。

近年、この倫理観の喪失を思わされるような社会的問題も多発していることから、こうした倫理的歪みの背景に、多様化する社会での人間疎外が少なからず関わっていると考えられる。人間疎外が進む社会において、倫理観を歪ます一つの要因には、人間が置かれている環境の影響も大きいと言えるのである。

2. 福祉現場の現状

社会福祉分野は、近年大きな発展を遂げ、成長産業として高齢者ビジネスなどの介護事業に参入する企業が多い。とりわけ、介護業界は異業種企業からの参入も多い。

少子・高齢化社会により、ますます福祉サービスの需要・多様化は、さらに見込まれているにも関わらず人材の量的確保と質の向上の両立には、問題が山積し厳しい現状がある。厚生労働省は、介護人材確保のために、現場で働く介護人材の定着促進を図るための対策に、「参入促進」「資質の向上」「労働環境・処遇の改善」^{(1)～(3)}を掲げ、限られた人材を有効に活用するなどの多くの取り組みを行っている。しかし、福祉・介護現場は人材確保と質の担保という大きな課題を埋められないまま、異業種からの中途採用の人材参入者たちに支えられ、この施設も運営しているのが実情である。

福祉・介護現場は、多くの職種や他分野での就業経験を持つ人材が、協働・連携し利用者支援を実践している。これらは、施設にとって幅広い人材の活用と言う意味では大きな原動力となる反面、専門教育を受講していない人材や、職種や経験値の異なる職員が多くいることは、支援対象者に対する価値の捉え方にも差異があり、提供されるサービスの質も異なると言ってもよい。当然、職員

同士の摩擦や価値の衝突も起こり得る。他産業、他職業以上に人間関係の調和が難しいのが福祉現場である。

公益財団法人介護労働センターによる平成28年度「介護労働実態調査」によると、福祉・介護現場の離職原因上位には、結婚や出産の理由に次いで、職場の人間関係を挙げているものが多く、施設内での職員同士の協働の難しさや人間関係の複雑化が、この結果からも明らかである。⁽⁴⁾

近年、福祉・介護現場で大きく問題視されているものに、社会的弱者とされる支援対象者への虐待や人権を無視するような劣悪なる対応などが、マスメディアにもクローズアップされることが往々にしてある。さらには、職員同士の人間関係の綻れによる犯罪など社会的逸脱した行為も噴出し、大きな社会問題となっている。障害者施設で元職員が起こした残虐な行為は、日本中を震撼させるほど福祉・介護施設職員の倫理観とはどのようなものか問うものであった。こういった問題は、減少することがなく、大きな問題として噴出した時に取り上げられることが多い。果たして、こういった事件の背景には職員の変化などの前兆はなかったのだろうか。

福祉・介護専門職が担う社会福祉の活動は、専門的な知識と、社会的に信任されることが必要不可欠とされる。対人援助職として職務に就く以上、支援対象者の尊厳を最優先した支援が望ましいことは、無論理解されているにも関わらず、なぜ悲惨な案件は減少しないのであろうか。このような背景に、福祉・介護に携わる職員の歪んだ道徳、倫理観が関与していると言えるのではないだろうか。福祉・介護専門職の倫理観の構築への道程には何が必要なのかを検討する。

II. 福祉専門職と人間疎外

近年、マスメディアなどに取り上げられ露呈する社会福祉領域の問題は、施設における虐待だけでなく、国からの補助金の受給不正など、多くの社会的問題がある。これらの歪んだ問題は、今日に始まったことではない。こうした問題が公になる背景には、施設評価チェック機能が厳しくなったことや、内部告発などにより、福祉現場の内情が露呈し社会問題化していることも事実である。

さらには、社会福祉本来の機能が十分に機能していないことはもちろんだが、福祉・介護専門職の専門性が効果的に発揮されていない制度的問題、対人援助職としての資質の問題も大きなウェイトを占めるといえる。

先述したように福祉・介護職員は多種多様であり、支援対象者への援助を実践している。資格有無や現場経験差異も、これほどバラエティに富んでいるところは、他の産業ではあまりみられない。無論、それが功をそうして大きな施設原動力となり、現状の改革の力にもなり得るはずなのである。大きな原動力となる逸材が揃っているはずなのに、施設運営にはどこも苦慮し、運営上の課題には「良質な人材の確保が難しい」⁽⁴⁾ことが上位に挙げられている。貴重な人材の中途参入者たちを、いかに教育育成していくかも今後の福祉施設の課題ではあるが、施設で起こる社会的問題には、支援に携わる職員それぞれの価値の多様性はもちろん、人を支援するうえでの倫理観の喪失や欠如により、社会的問題を引き起こしていると言えるのではないだろうか。

これらの人に対する倫理的欠如や喪失で起こる社会的問題は、福祉・介護現場に限ってのことではなく、現代社会で起こる多くの社会問題に繋がっていると言ってよい。人間らしさを見失うこと、つまり人間疎外は人倫の喪失も大きく関与していると言えるのではないだろうか。こうした人間疎外が進むことは、対人援助の実践において、もっとも危惧される問題であり、人間が人間を支援するうえで、他者の尊厳を無視する行為は、福祉専門職においては決して、あってはならないことである。

Ⅲ. 倫理と福祉専門職

1. 倫理の構築過程

倫理とは、人間生活の秩序や人倫の中で踏み行うべき規範の道筋とされている。人の価値の形成には、環境の影響は大きく、同じように倫理的視点も左右される。社会が複雑化し価値の多様性が認められる現代において、倫理観をどうあるべきか取り上げることは極めて難しい。それは倫理を、どの視点から捉えるかによっては、全く異なった様相を見せることにも関係する。生命倫理や職業倫理の問題もどう捉えるかは、その人個人の思考であり、人それぞれ判断が異なる。倫理の正論とは、判

断する個人で異なることから、生命倫理も職業倫理の正論も、判断する自分自身の価値で答えを出すことになるのである。だからガイドラインやマニュアルがあるのだが、人の心はそれさえも捉え方に差異があるのである。価値の多様性が叫ばれ、どのような考え方も受け入れられる時代は素晴らしい反面、何もかもが許される社会へと今後さらに変容するのならば、人間の倫理的観点もどれも正論となってしまう人倫は崩壊すると言ってよい。

人間の倫理観の構築は、生きていく発達過程で社会性を身につけ善悪の判断を学習していく。つまり、生活の過程でいつの間にか、倫理や道德というものを学んでいく。社会的経験のなかだけでなく、学校教育においても倫理や道德について思考する講義は、成長発達の段階でいくつも準備され、環境のなかで倫理観は形成されていく。近年、多様化する社会において数々の問題に対応するべき力を身につけるために、学校教育の道德教育の見直しとして、文部科学省も学習指導要領「生きる力」⁽⁵⁾として展開し始めた。

2. 福祉専門職の倫理教育

福祉専門職において倫理観の構築には、教育カリキュラムのなかで、職種倫理綱領に照らし合わせた講義の展開を実践し、複雑に絡み合ういくつかの科目の中で統合的に教授している。学修を進めていくなかで、対象者の尊厳が一番重要視して教授する部分であり、資格取得する過程で講義や演習、実習を通して体系的に身に付けていく。言うならば、倫理という言葉での定義的なことは学修し、わかっているはずなのである。人が人を支援する過程において、最も重要である相手のことを思い行動することのプロセスは、学修する機会として多く準備されている。

しかし、一旦学校を卒業し現場に出ると、多様な価値の人材のなかで揉まれ、自分自身の正論として捉えていた価値や倫理感が揺らぐのである。自分の価値や倫理観が揺らぐだけならばまだしも、時としてそれが思考の歪みへと発展し、大きな社会問題となることもある。こうした状況への変化は、福祉専門職の養成校で学ぶ学生に限ったことではなく、多様な人間性が繰り広げられる福祉・介護現場では、なにかのはずみで専門職としての倫理観が音を立てて崩れ、虐待などの逸脱行為として社会的問題へと発展するのである。

それでは、なぜ専門職として使命感がありながら、倫理的に反する逸脱行為が現場で起きるのか考えていきたい。

IV. 福祉専門職から見えてきた課題

1. 施設職員・現場からの課題

岡山県キャリア形成訪問事業として2017年に福祉施設18施設に講義形式で訪問研修を実施。研修内容は対人援助職としての「認知症の理解」や「緊急時の対応」についてのもので、研修終了後に研究に使用する旨を伝え質問紙調査を実施。この質問紙は、研修に対する満足度を調査するためのスケールとは別に、それ以外に自由記述欄を設け、研修の感想などを記載してもらった。研修の意見が大半であったが、なかには、福祉現場の現状が垣間見える回答もあり福祉施設の課題が浮き彫りとなった。以下、自由記述内容一部抜粋、そのままの言葉を引用・経験年数記載

■自分がどれだけ、ここに必要なのか、ためしてみた。利用者との関係でけんかもあり、関わりたくないと言われ、もう関わっていないのですが、上のひとからの態度がすごくひどいです。仕事がしにくい。利用者ところから関われない。(経験年数2年)

■周りから反対の意見を言われるとつぶされそうになります。いつも困った利用者さんのせいにしたり、自分たちの関わりを考えない現場で日々悩んでいます。(記載なし)

■職場ストレスや不満が多くなんとか解決しようと思うとしんどい。(経験年数30年)

■自分がしていることが正しいのかも違っているのか、わからなくなる。(経験年数13年)

■何もかも頭が回らず常に頭の中が真っ白になった。(経験年数9ヶ月)

これらの言葉から推測し、福祉専門職が倫理的に反する逸脱行為に至るまでの思考のプロセスの仮説を立ててみた。

(考察)

福祉専門職として、支援対象者に誠実に接することの重要性についての認識は十分にある。しかし、何かの原因で自分自身の気持ちが穏やかでなくなった時に、自分

自身の価値が揺れる。福祉現場は多様な人材と価値が溢れ、支援対象者への向き合い方がそれぞれ異なり、協働する難しさがある。価値の摩擦が持続することで、気持ちが疲弊する。心が穏やかでなくなるとは、曖昧な表現ではあるが心が落ち着かず心的安定が得られない状態のことを指し、自分らしさを失うこととされる。こういった背景に陥る要因には、支援対象者との関係、それ以外にも職場での人間関係や職場自体への不満などが考えられる。このような不安定な心的状況が続けば、当然離職や職場のなかでの孤立も考えられ、倫理観の歪みから問題へと発展しかねないとする。

以上を踏まえて、介護福祉士養成施設（以下養成校）を卒業して間もない福祉現場に就職している現場職員と養成校で学修中の現役学生を対象に福祉専門職の倫理観について考える機会を設けた。

2. 介護福祉士養成校の課題

福祉専門職の倫理的課題について、講義を行い、福祉現場で起こる問題とされる関連ニュースや新聞記事などを用い、なぜこのような行為が起きるのか考えてもらった。養成校現役学生は「介護の基本D・介護福祉士の倫理」の単元で、養成校卒業の現場職員は「卒後教育・福祉専門職の倫理観とは」の講義のなかで行った。

なお、卒後教育を福祉専門職という括りにしているのは、調査対象である本学養成校卒業生たちの就職先が保育および介護などの現場に就職しているため、「福祉専門職」という大きな括りとした。

(卒業後1年)

■倫理観は、普段考えることがない、職場にいとその場に流され自分の考えはない。

■働き始めたころの気持ちが失われていく。理想と学校での違いや他の職員の当たり前さに悩むことがある。

(卒業後4ヶ月)

■相談する相手が職場にいない。話せる人に話をし何と自分の気持ちを落ち着かせようとしている。

■自分が段々、ウェルフェアでなくなっていくことを実感した。もっと誰かに相談したいと思った。

■心の闇を抱えすぎたくないで、誰か相談できる人がいるといいと思った。

■虐待した人の気持ちがわかる。誰かに話せてなんとかもちこたえた。

(養成校現役学生)

■倫理観とは何かと聞かれても自分ではどういったものなのかわからない。

■辞典などで調べてみたが、はっきりとしたイメージがつかめていない。

■「立場によって意見が分かれる事柄」と調べたら書いてあった。

■倫理観は、人それぞれ違うのではないかと思った。

■どんな時でも相手を大切にすること。これが重要だと考える。

(考察)

養成校の学生たちは、講義の中で職種別の倫理綱領に照らし合わせて職業倫理について学修を行う。さらに生命倫理に対しても、障害者支援や終末期支援など、多くの教材のなかで学修し、それらを統合し、自分自身の倫理観を確立していく。そういった意味では、これは典型的なマニュアル的な倫理観である。その一方で、卒業後現場に入っていく元学生たちの言葉からは、理想と現実の狭間で揺れながら福祉・介護現場の現状に流されながら、これで良いのかと自答自問している様子も伺える。さらには、自分が苦しい心的状況の時に相談する相手や気持ちの共有が出来ない場合の心境の状態が理解できる。

同じように教育を教授された状況でも、置かれている環境によって、現役学生と卒業して現場で勤務している者では、明らかに状態が異なり福祉に対する倫理観にも変化が見られることがわかる。

3. 両課題からのまとめ

福祉専門職として、支援対象者と向き合い他職種と連携しながら業務を遂行していくことは当然であり、忘れてはならないことである。自由記述からもわかるように福祉現場のなかでは、大きな課題が含んでいることも見えてきた。

養成校で学修する現役学生たちは、それまで培ってきた自分自身の価値と学修する内容を統合し、福祉専門職としての倫理観を確立していく。しかし、一旦現場へ入職すると、多種多様な職員同士、あるいは利用者や施設の価値の多様性に惑い、自分自身の培ってきた倫理観が揺らぐ。何とか、その現状を変容させる努力をする者や、他者へ相談できる環境整備されている場合もあるだ

ろうが、問題が蓄積されていくと大抵が離職を考えるか、自身の価値を塞いで職場の波に流されていくのが往々にしてあり、存在するのではないかといえる。さらに、煩雑な業務が多い福祉現場では、気持ちが疲弊する職員同士の変化に気がつかず、いつのまにか職員の心的歪みが進行し、それが施設内虐待などの社会的逸脱行為へと発展することも考えられる。

福祉専門職は、当然ながら支援対象者を支える立場にあることは認識している。職務を全うする多くの職員が資格保有無しに限らず、使命感が高いことも示唆される。しかし、自分の置かれている職場の環境によって、価値の状態も変化が起き、本人の認識とは別のところで、心が揺らぎ、もしくは気がつかないまま変化していくものと考えられる。そういった歪んだ心的状況が続く施設のなかでは当然、職員の支援対象者への関わり方にも変化が生じると言えやしないだろうか。

V. 福祉専門職の倫理的思考の変化

福祉専門職は、業務の遂行にあたり施設理念や自分自身で培ってきた価値に基づく倫理観のうえで対象者に支援を行っている。当然のことながら職業倫理は言葉として認識していることは多い。

例えば、対象者に対する誠実義務、虚言行為はしないことなどは、当たり前のこととして理解している。養成校においても重点的に職業倫理の項目は抑えるべき内容であることは間違いなく、必ず教授する内容である。しかし、支援する側の福祉専門職の心的状況が何かしらの変化があれば、おのずと倫理観にも変化が現れるといつてよい。

仕事を遂行するうえでの倫理観が変化していく心的変化の過程には、職場の環境に流され気がつかないまま変化を起こす場合や、時として自律神経症状のような体調不良を訴える場合もある。現状に耐えられない場合は、やはり離職を選択するであろうと考える。

人間が心的極限に陥った時どうなるかは見えないからこそ、状況がインプットされた後、見えない部分、つまりブラックボックスのなかで、どのように心が変化し、アウトプットされるかがわからないのである。いずれにしても心が穏やかでなくなるとブラックボックスのなか

で心が揺れることは確かである。

自分のなかで折り合いを見つけ、アウトプットされる心の揺れが、解決の道へ進展する場合もあるだろうが、ほとんどの場合は、自分自身の気持ちの変化に、本人さえも気がつかないまま価値や倫理観も歪んでいることもあるといえる。本人自身も気がつかないまま人間の心が変化し、こういった現状が施設のなかで知らぬ間に進行し様々な問題へと発展していると考えられる。

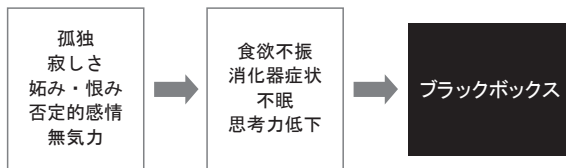


図 1

VI. ま と め

1. ブラックボックス

倫理観は、人それぞれの捉えた方やこれまで培ってきた経験や環境で異なる。その時々によって変わっていき、その人自身の置かれている環境によって変容していく。人と接するうえで価値や倫理観は重要な要素ではあるが見えにくく捉えにくいもので、その人自身の思考によって異なる。いわば正解があるようでないものだから難しいのである。倫理や道徳的感情は捉えにくい難しいものではあるが、人間社会のなかでは重要な観点であることは間違いない。

福祉専門職の倫理観は、職業倫理や生命倫理ともに認識しておく部分であり、そのために専門職の倫理綱領が存在し、それに照らし合わせて業務を遂行する。それはある意味、支援対象者と関わるうえで、当たり前の認識であり、福祉専門職ならば誰もが認識していることだともいえる。重要な部分を認識しているにも関わらず、施設のなかで倫理的に反する逸脱行為が噴出するのである。

この「わかっていて、起こる」という部分が非常に問題で、人間の心の闇、つまりブラックボックスといえるのである。ブラックボックスの後に出現する人間の行動が、どういう現れ方をするのか課題であるといえる。それが離職という逃避的解決なのか、社会的弱者への虐

待などの社会的逸脱行為となるのかは、その時々闇の深さと倫理観の崩壊具合によって異なると言えるのではないだろうか。

いずれにしても気がつかないまま進むことの先にある闇が大きくなればなるほど、社会的問題へと移行することは間違いない。

2. 人間疎外の影響

現代社会で起きる社会的問題の背景には、失いつつある人間疎外が大きく関与しているといっても過言ではない。他者を顧みない個人主義、利己主義的思考が横行し、最も犠牲となるのは社会的弱者である。介護・福祉職の倫理的問題に関する事件は、こういった状況と全く無関係であるとは言い難い。

倫理的な逸脱行為は、人が人を支援する職種においては、あってはならない許されない行為ではある。しかし、なぜか後を絶たず同じような問題は繰り返し起こる。外部評価やチェック機能、研修制度が整備されても、なかなか改善できない現状があり、マスメディアで報道される内容は氷山の一角である。このような他者を顧みない社会的問題は、福祉現場だけの話ではなく、社会全体において増加することに危機感を募らされずにはいられない。

社会的問題が起こる背景にある人間の価値の本質が、何かの拍子に歪むことは誰にでも起こり得ることで、ふとした時に脆く崩れることは十分ある。人間は、常に変容する社会への適応と危機にさらされ、そうしたなかで自分自身を守る術を身に付けていく。その人が置かれている環境によっては、他者と自分との優劣や利害関係で、自分のとるべき行動を考えると利己主義へと発展していくことも考えられる。こうした人間の歪んだ行動が、多くの社会問題を引き起こしている要因であるといえるのである。

福祉現場での社会的問題は、本人の気がつかないまま倫理観が歪み、理不尽な状況からのフラストレーションの捌け口として社会的弱者である支援対象者に向けられる虐待などの問題に変化していくものだともいえる。人間は誰しも無意識の根底には、冷淡な部分も必ず持ち合わせている。それが何かの拍子に表出し、社会的逸脱行為へと変化すると考えられる。こうした善悪の感情は表裏一体であり、それらを抑止するのが理性や思考ではあ

るとされるが、人間は置かれている環境や極限の状況に追い込まれた時には、どのように心が動くかはその時々で、変化していくといえるのである。

対人援助職の場合、アウトプットされたものが逸脱行為として表出した場合は、社会的信用を落としかねず、社会的弱者への許されざる行為として大きな社会問題としてクローズアップされるのである。

3. 教育の力

このような社会の現状は、福祉・介護職員だけの問題に限らず、人間疎外が加速することで人間の心を歪ませることを知っておくことは重要である。それを抑止するためには、やはり教育の力は大きいと考える。様々な事象の背景には、人間の根底に潜む感情部分のほう人間の本質であるともいえ、誰しも持ち合わせている部分であるが、内観することはあまりない。しかし、敢えてその部分を内観し認識することも人間形成には必要であると考え。

福祉施設で起こる倫理的に逸脱する行為は、決して許される行為ではなく、矛盾に対して起こる人間の心的変化で起きた事象だとしても、それは対人援助職としては決して許されることではない。ましてや、施設の中で見逃してはいけない事実である。介護技術や理論的講義の質の向上も重要であるが、人が人を支援するうえで心の教育こそが急がれるところであり、対人援助者として自分自身を内観すること、職員同士の変化を見逃さない環境整備が望まれるところである。

現状の解決には、何より教育こそが社会問題へと発展する前の大きな抑止力へと繋がるものであると考える。大きな問題が起こる前に、施設内で予兆がなかったのか、誰もそこに至るまでの職員の変化に気がつかなかったのか、もしくは見て見ぬふりをしていなかったのかにも大きな違いがあり、いずれにしても問題が起こる前に抑止する教育や環境作りが必要であるといえる。

倫理観の構築は、福祉専門職として最も重要な「他者を認め、自分を知る」、この当たり前の実現が最も難しく、支援対象者の尊厳を守ることが対人援助職の使命であることを忘れてはいけない。

VII. 今後の課題と展開

福祉・介護現場は多大な力の集団であるが、職場環境、人材の質や教育的課題、離職率の高さなど山積している。職場定着率の低さの原因に3K(汚い・きつい・給料が安い)や5K(汚い・きつい・暗い・危険・臭い)が挙げられるが、それだけではなく人材同士の摩擦の要因も大きい。支援対象者との関わりや職員同士の連携など、人が人に関わる難しさが凝縮されているのが福祉施設である。つまり、人間同士の価値の相違による矛盾やコミュニケーションの希薄さがじわじわと現場職員のところを蝕んでいった結果、多くの社会的問題が噴出すると考える。このような現状を打破していくためには、早急な福祉・介護現場の環境整備を重要なことのひとつであることはいうまでもないが、人間疎外がもたらす社会への状況を認識することも重要であると考え。

文部科学省は、道德教育の重要性について、学習指導要綱になかに「道德的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道德性」⁽⁵⁾を掲げ教育の根幹に挙げている。定型的に方法論に留まるのではなく、豊かな人間性を養う教育のあり方を模索していく必要があるとともに倫理や道德は、生涯、人として考え続ける課題ではでないかといえる。

人が誰しも持ち合わせている部分を内観すること、すなわち自己を見つめ、他者を認める社会こそ人間疎外からの脱却と倫理観の形成には必要なものだと考える。

VIII. おわりに

現代社会で起こる大きな問題全てには、人間そのものの心情が関わっているといっても過言ではなく、心的変容には人間が置かれている環境の影響は多大である。人はそれぞれ生まれた環境も育つ環境も違う。そのため、価値も違えば善悪の判断も異なる。倫理的観念も人それぞれであり、個性や価値の多様性により課題の複雑化を招いている。

大きな社会問題が起きたとき、現代社会はその起きた事象の結果ばかりを追求し問題視するが、その事象が起きた背景にある真実まで目を向けることはあまりない。しかし、その本質を変化させない限りは、同じことは繰

り返されるのである。福祉現場で繰り返し起こる社会問題も同じくで、状況を見つめ変化させていかない限りは、同じことは繰り返されるのである。

本研究では、福祉専門職に限定して、人間疎外という観点から倫理観を考えてみたが、福祉・介護現場は多様な価値の集団であり方向性を間違わなければ、その原動力は素晴らしいものがある。福祉専門職として、自分と接する他者の存在を素晴らしいものと認める環境や、生涯学ぶことのできる教育環境や社会の在り方が求められ、それらが現状の問題の解決へ一歩前進するものと考ええる。

(引 用 文 献)

- (1) 厚生労働省 第4回社会保障審議会福祉部会 福祉人材確保専門委員会 (参考資料3)
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000075030.html> (2017-12-20閲覧日)
- (2) 厚生労働省 4 福祉・介護人材確保対策
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2015/02/d1/tp0219-08-02p.pdf> (2017-12-20閲覧日)
- (3) 厚生労働省 介護人材確保について
全国介護保険・高齢者保健福祉担当課長会議
資 料 <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000115521.html> (2017-12-20閲覧日)
- (4) 平成28年度「介護労働実態調査」の結果
公益財団法人介護労働安定センター
- (5) 文部科学省 道徳学習指導要領「生きる力」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/dou.htm (2017-12-20閲覧日)

(参 考 文 献)

- (1) フィリップ・フット高橋久一郎監訳
河田健太郎・立花幸司・壁谷彰慶訳
「人間にとっての善とはなにか 徳倫理学入門」
2014 筑摩書房
- (2) 小西真理子「共依存の倫理」2017 晃光書房
- (3) 葛生栄二郎「ケアと尊厳の倫理」
2011 法律文化社

- (4) 松本一生・松本章子
「介護のところが虐待に向かうときーその真実を知るー」2016 株式会社ワールドプランニング
- (5) 高月義照「人間学ーこころの地動説ー」
1994 北樹出版
- (6) 岡野守也「トランスパーソナルの心理学」
2000 青土社
- (7) 吉田輝美「介護現場で何が起きているのか高齢者虐待をなくすために知っておきたい現場の真実」
2017 ぎょうせい
- (8) 市川和彦「続・施設内虐待克服への新たな挑戦」
2002 誠信書房
- (9) 清水隆則・田辺毅彦・西尾祐吾「ソーシャルワーカーにおけるバーンアウトその実態と対策」2002 中央法規
- (10) 篠原駿一郎・波多江忠彦「生と死の倫理学良く生きるためのバイオエシックス入門」2002 ナカニシヤ出版
- (11) 高橋五江「社会福祉専門職の倫理の基盤について」
1997 淑徳大学社会福祉部研究紀要 第31